

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：30110

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25463308

研究課題名(和文) 新人看護師の知の構築プロセスの可視化とキャリア形成評価ツールの開発

研究課題名(英文) Clarification of the process whereby new nurses gain practical clinical wisdom and the development of an assessment tool for nurses' career development.

研究代表者

杉田 久子 (SUGITA, Hisako)

北海道医療大学・看護福祉学部・准教授

研究者番号：90316258

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：新人看護師が臨床看護実践を通して成長するにつれ、どのように看護実践を意味づけし知を獲得するのか、その構築プロセスの様相を可視化するために、「臨床看護実践を語る会」での語りを検討した。その結果、新人看護師が20カテゴリー、2年目看護師が11カテゴリー、3年目看護師が14カテゴリーの知の語りで表現され、看護師のキャリア形成の初期段階の知の獲得の解明となり得た。また、キャリア形成に係る要素は、新人看護師で43項目、2年目看護師で32項目、3年目看護師で14項目の総計89項目が抽出され、キャリア形成評価ツールの原案を提供した。

研究成果の概要(英文)：Data collected at multiple group discussions on clinical nursing practice were analyzed for the purpose of identifying various aspects of the process in which new nurses give meaning to their nursing practice and gain practical clinical wisdom through clinical nursing practice. Discourse analysis showed that the practical clinical wisdom expressed by the respondents could be divided into 20 categories for first-year nurses, 11 categories for second-year nurses, and 14 categories for third-year nurses. The discourse analysis helped to understand how nurses gain practical clinical wisdom in the early stage of their career development. Elements that make up nurses' career development were also extracted from data gathered by conducting group discussions and interviews. A total of 89 elements were extracted (43 for first-year nurses, 32 for second-year nurses, and 14 for third-year nurses). These elements were used for developing a tool for assessing nurses' career development.

研究分野：基礎看護学

キーワード：新人看護師 臨床看護実践 継続教育 キャリア教育

1. 研究開始当初の背景

医療の高度化や国民のニーズの多様化など医療を取り巻く環境は大きく変化している。この変化に応えるために看護師の能力や資質の向上が求められ、看護基礎教育のあり方についても検討が重ねられている。厚生労働省(2008年)の「看護基礎教育のあり方に関する懇談会-論点整理」において、看護の発展に必要な資質と能力は、実践知を理論知として普遍化し、また理論知を実践知に結びつけ自ら活用することであると整理されている。しかし、このような資質や能力に至るには、相当に熟練した看護師でなければ為しえない。

看護実践の知の構築にはプロセス、ダイナミクス、相互作用が必要不可欠な要素であるとされている。つまり実践知を個人の知としてとどめるのではなく、実践共同体として共有化を図ることによって、自己と学習した内容(これまでに獲得した知識やスキル)を関係づけたり意味づけたりする相互交流の場によって、看護の知が構築されていくことが期待できる。看護の実践知を質的手法によって可視化した研究は、これまで熟練看護師を対象としたものはあるが、キャリア形成過程の初期段階については不明な点が多い。また、学習される知の観点から、知の構築のプロセスを縦断的に分析した研究は見あたらない。

卒業前看護学生を対象とした先行研究では、「看護実践を語る会」での語りの共有から、看護学生の関心の中心は、不安定な自己像とあるべき理想の看護師像とのギャップを埋めるといふ、個人知のパターンが優位な知の様相が見いだされた。また、結果から現状にある自己課題を具体化し、自己成長の形成的評価ができるツールの開発の必要性が示唆された。

一方、看護基礎教育においては職業教育が当然とされていながらも、看護職の早期離職について問題視されて久しい。日本看護協会(2012年2月)の発表によれば、新卒看護職員の離職率は8.1%で微減傾向にあるものの、通算経験3-5年目の離職率が高い傾向があることを示した。これらのことから、看護基礎教育から職業教育に向けたキャリア形成支援方法の整備・充実が急務であるといえる。

2. 研究の目的

本研究は、新人看護師から臨床経験3年看護師までの看護実践の知の構築の様相を縦断的に見だし、得られた結果から看護基礎教育から続く新人看護師キャリア形成評価ツールの試案を作成することを目指し、看護基礎教育および看護実践現場の職業教育におけるキャリア形成支援の基礎資料を得ることを目的とした。

本研究では、新人看護師が臨床経験を通して成長するにつれて、どのように看護実践を意味づけし、「知」を獲得しているのかにつ

いて可視化する。「臨床看護実践を語る会」を軸に、実践共同体として共有化を図り、ディスカッションの場を通して、個人知の掘り起こしを期待するものである。また、「臨床看護実践を語る会」で語ること自体が、参加者にとってのコミュニケーション能力や、自己理解に繋がるといった副次的効果も期待される。得られる結果から試案作成される自己評価ツールは、主体的な看護キャリアデザインを形成するためのガイドとなることを期待するものである。

3. 研究の方法

(1)「臨床看護実践を語る会」の開催方法

本研究では、北海道内の地域中核病院(A病院、B病院)に入職した新人看護師を対象に、初年度から3年間にわたり研究参加を呼びかけ、「臨床看護実践を語る会」を2~3回/年継続的に開催した。

参加者には、あらかじめ設定した語りのテーマを周知し、看護実践の事実関係や場面を想起してもらった。その内容を基にして「臨床看護実践を語る会」を開催し、グループディスカッションを行った。このグループディスカッションでは、思考過程の理解を促すことや、仲間の語り合いから新たな理解への発展を促すことを目的として、看護教育経験のあるファシリテーターを配置した。時間は1回につき60分程度とした。終了後に、看護実践の語りの意味を考える目的で、各自が語った内容や気づきについて、個人インタビューを1人につき10~15分程度実施した。

(2)課題1.新人看護師から3年目看護師までの知の構築プロセスの可視化

臨床看護実践における新人看護師から3年目看護師までの知の構築プロセスを明らかにするために、新人看護師(初年度)を対象とした「臨床看護実践を語る会」(2~3回/年)を継続的に開催した。語る会で得られたデータを、質的帰納的手法により各年度で語られた知の表現の様相を明らかにした。

(3)課題2.看護キャリア自己評価ツールの試案作成

「臨床看護実践を語る会」で語られた内容から、キャリア形成に係る要素を抽出した。抽出した要素を整理・検討し、看護キャリア自己評価ツールの項目原案を見いだした。

(4)課題3.「臨床看護実践を語る会」の参加者評価の調査

「臨床看護実践を語る会」の参加者評価を得ることを目的としたアンケート調査を実施した。最終回終了後に、「臨床看護実践を語る会」の参加度、開催頻度、時間設定、テーマ設定、参加態度、ファシリテーターへの意見、語る会への要望、継続性などの定性的意見を含む20項目によるアンケート調査を行った。

4. 研究成果

(1) 新人看護師から3年目看護師までの知の構築プロセスの可視化

平成24年10月～平成27年2月までの3年間、急性期総合医療を提供するA病院において、「臨床看護実践を語る会」を計7回実施した(新人看護師3回、2年目看護師回、3年目看護師2回)。参加者は3年間継続して研究に参加の同意を得た4名であった。

分析の結果、新人看護師から3年目看護師が語る臨床看護実践における知の様相は、新人看護師が20カテゴリー、2年目看護師11カテゴリー、3年目看護師14カテゴリーの語りの概念として表現された。

新人看護師が語る知の表現では、患者との関わりや先輩看護師との関わりを通して、看護師としての自立や自律を見いだす〔看護実践の知〕の語りと、自分のことだけで精一杯な入職当初、周囲に気を配れるようになった入職6～8ヶ月、これらを経て自己の到達点の模索を示す〔自己成長の知〕の語りが見いだされた。分析結果から、看護実践の経験を一つひとつ積むたびごとに周囲からの影響を受けながら成長することを自覚している個人知の様相が明らかとなった。

2年目看護師は、これまで場面単位で認知していた状況を文脈として理解できる変化を自覚し、積極的に医師や先輩看護師に働きかけて自分の意見を発信し、内省を繰り返す経験を重ねることで発展途上にある成長を実感していた。また、患者状況にコミットすることで感情が動き、その実践が次の実践の成功となるように、さらなる高みを目指しており、看護実践の審美性を認識し、先輩看護師を単なる憧れの存在としてではなく、その凄みを見極めて学びとして継承することが語られた。分析の結果から、自己成長や達成感を感じつつ、業務偏重となることで生じる理想とする看護師像とのギャップや葛藤を抱えながらも看護実践の経験から新たな意味を見出しており、そこにはエキスパート看護師の看護実践から学ぶ審美的な知についても語られた。

3年目看護師では、〔自分らしい看護の将来像をもつ〕〔自分なりの倫理的価値観をもつ〕ことを基盤とした知の表現で構成された。分析の結果から、理想とする看護の像が自分の中で腑に落ちて、明確で具体的な看護実践のビジョンとなり、失敗や後悔などの経験から学んだ本質的な目標ができて、自分なりの倫理的価値観と実際の看護実践の価値観について、時に葛藤を覚えながらも、自分らしい看護の実践を見いだしていることが明らかとなった。

(2) 看護キャリア自己評価ツールの試案作成

平成25年12月～平成28年3月までの3年間、急性期総合医療を提供するB病院にお

いて、「臨床看護実践を語る会」を計8回実施した(新人看護師2回、2年目看護師3回、3年目看護師3回)。参加者は28名の看護師であった。

キャリア形成に係る要素は、グループの語りから343項目、個人の語りでは488項目が抽出された。これらを統合した結果、新人看護師から抽出された要素は、「一日ただ流れて終わってしまって、すごく不全感が残ったままになることが多い」や「何か言われてやるのではなく、自分で気づいてこうしようと思ってやることができきた」など43項目であった。2年目看護師では、「自分だけで抱え込まずに先輩に相談している」や「技術面だけじゃなくて、そこに心がある看護をして、自分の中でも腑に落ちていくことを課題にしたい」など32項目であった。3年目看護師では、「その患者にしたい看護として自分のスタンスができたような気がする」や「本当に患者のためになっているのか、自己満足ではないかという疑問をもつことをこれからも大切にしたい」など14項目であり、総計89項目まで整理された。

新人看護師から3年目看護師までのキャリア形成の期間で、概して業務遂行上の不全感を感じ、先輩看護師との比較において達成度の不十分さを自覚するが、自己成長の部分においては、知識・技術が満たされてくるにつれ、心に余裕ができるため、看護実践における関わりが自立することで、楽しさや辛さ、自信と責任を強く感じていた。業務優先の日々にある中で、理想を追いしつつも、現実的なあるべき看護師像を確立していくキャリア形成の様相が見受けられた。

(3) 「臨床看護実践を語る会」の参加者評価の調査

2施設(A病院、B病院)の「臨床看護実践を語る会」参加者の調査結果より、対象者の等質性には違いがあったものの、「臨床看護実践を語る会」に参加した参加者意見としては、明確な差異はなかった。

「臨床看護実践を語る会」の運営実施方法については、参加者からは概ね好評価が得られた。しかし業務上の都合で参加ができない場合もあり、自由度を確保しつつ誰もが参加可能な研修プログラムを検討することが必要であった。また、「臨床看護実践を語る会」の企画内容についても、参加者からは概ね好評価が得られた。参加によって、気づきや自己の振り返り、同期の仲間と話せた満足感が得られた。「臨床看護実践を語る会」のテーマ設定については、概ね興味を示していたが、テーマが「一皮むけたと感じた」などのような抽象的な表現の場合、そういった経験がそれまでにあるという自覚に乏しい場合には、語り出しが困難であった。「変化したこと」や「成長したこと」等には一定の興味を得ていることから、意味合いは類似していても感覚的に認識しにくい表現は控える方が良い

ことが明らかとなった。参加者からは、今後も継続して参加したいという意見が得られた。業務調整の困難さにより継続した出席が難しいなどの課題があるが、参加者にとっては「臨床看護実践を語る会」に参加する価値や意義を見出していたと考えられるため、今後は自由参加で中途辞退・途中参加の自由度を維持しつつも、研修プログラムのパッケージとしての意義の明確性を強化し、定期的な参加が可能な調整とある程度の人数確保ができるようにしていくことが望まれる。また、回答の中には、中堅看護師や熟練看護師を対象とした「臨床看護実践を語る会」の企画を望むことも示唆されており、今後も引き続き検討していきたい。

(4)まとめと今後の課題

本研究では、「臨床看護実践を語る会」というグループで語るスタイルをとることによって、話す人も聞く人も互いに啓発されて、この「語らい」の中で、暗黙知が言語化されていた。したがって、看護の知を表現し看護実践能力を高めていくことにおいても「臨床看護実践を語る会」は充分に有用性があると言える。今回の2つの研究結果においては、先輩看護師の関わりや助言が新人看護師の自立・自律を促すためにとても重要であった。目の前のことしか考えられなかった新人から、徐々に基礎的な知識が根づいて、より対局を意識するようになることで、実践知を感じはじめ一人前のレベルになる途上にあると考えられた。そういう意味においても、語らいの場を作ることは、自己成長を促し、キャリア形成支援に役立つことが確認できたので、今後は、研修プログラムを作成提示するなどして、その有用性を検証していきたい。

本研究に着手してから今日までの間に、新人看護師研修プログラムは整備、充実がはかれ、早期離職率も減少傾向にある。しかしながら常勤看護師の離職率については横ばいから微減傾向である。中でも中堅看護師においては役割遂行やワークライフバランスとの葛藤を抱えており、中堅看護師のバーンアウトが問題となっている。とりわけ5年以上の看護職者に対する継続教育や能力支援については十分であるとは言いがたい。今回の研究過程における参加者においても、今後も続けて欲しいという意見もあった。キャリア支援では、継続して自己成長を確認し、自分のビジョンを明確にすることで「今、なにをすべきか」を確かめていくことが重要だと考える。したがって、新人看護師から続く、中堅看護師におけるキャリア支援ツールを作成することに着手したいと考えている。本研究の過程では、要素の抽出段階で、多くの実践事例が語られていた。こういった患者との関わりの知から、学びを共有できるようなツールの検討を今後も続けていきたい。

以上の研究成果は、新人看護師が臨床経験

を通じて成長するキャリア形成の初期段階の知の獲得の解明となり、キャリア形成支援のガイドとして還元可能である。今後はさらに、キャリア形成に必要な要素として抽出された項目を吟味・精練し、活用可能なツールを提供する検討をすることを課題とする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計3件)

杉田久子、唐津ふさ、西村歌織、福井純子、
3年目看護師の臨床看護実践の知の語り - グループインタビューの分析から -、第35回日本看護科学学会学術集会、2015年12月6日、広島国際会議場(広島県・広島市)。

杉田久子、西村歌織、唐津ふさ、福井純子、
臨床看護実践における2年目看護師の知の語り - グループインタビューの分析から -、第34回日本看護科学学会学術集会、2014年11月30日、名古屋国際会議場(愛知県・名古屋市)。

杉田久子、唐津ふさ、西村歌織、臨床看護実践における新人看護師が語る知の様相、第39回日本看護研究学会学術集会、2013年8月22日、秋田県民会館・アトリオン(秋田県・秋田市)。

6. 研究組織

(1)研究代表者

杉田 久子(SUGITA Hisako)
北海道医療大学・看護福祉学部・准教授
研究者番号：90316258

(2)研究分担者

唐津 ふさ(KARATSU Fusa)
北海道医療大学・看護福祉学部・講師
研究者番号：20285539

西村 歌織(NISHIMURA Kaori)
北海道医療大学・看護福祉学部・講師
研究者番号：20337041

福井 純子(FUKUI Sumiko)
北海道医療大学・看護福祉学部・講師
研究者番号：10632565